

学校教育審議会学校視察の感想について

日 時 平成25年10月28日（月）

午前9時15分～午前12時

行き先 西布施小 → 本江小 → 大町小

西布施小（過小規模校）

- ・ 少人数教育の特色を活かして、きめ細やかな指導が行われ、成果を上げていた。いじめや不登校、問題行動もない。
- ・ 自然に恵まれており、子どもたちも伸び伸びしていた感じがした。授業の話もまとまりやすく、楽しそうだった。
- ・ 先生が児童一人一人をじっくり丁寧に見られていたように感じた。
- ・ 複式学級では、児童に進行役をやらせるなど工夫してあった。
- ・ 学年の壁がなく、（児童全員が）団結力があるようにみえた。

- ・ 複式学級では、担任の先生が2つの学年を別々に指導せねばならず、授業計画をつくる段階から授業の実施まで、先生の負担が非常に大きくなる。
- ・ 複式学級では、子どもたちも指導を受けていない時間が授業中の半分を占め、様々な工夫をしているものの、行き届いた教育ができるのか疑問が残った。
- ・ 教職員数が少ないため、出張や年休が重なると、学校として対応できないということであった。
- ・ 授業を受けていても気が散る、集中力を欠くと思われ、好ましい環境であると捉えることはできなかった。
- ・ （複式編成クラスも）教室は別々にあるが、先生の一人は臨時の教諭なので、本気度はどうかかわからない。また、特別支援学級のようにも感じた。
- ・ 前回の審議会資料の説明で、人間関係、人間性、協調性、連帯性、自律、活力、切磋琢磨というキーワードがあったが今の世の中で一番欠けているもの。人間形成の基礎となる大事な時期において、小規模校（特に複式学級）ではこれらのことが全く培われていかないと思う。
- ・ 校長から中1ギャップという言葉聞いたが正にそのとおりだ。現場を知る校長として大規模校にない良さを話された一方で、小規模校としての弊害、デメリットを切々と話されたことが印象に残った。
- ・ 複式学級の場合、同じ教室で異なる学年の授業をしていると、子どもたちは他学年の授業が気にならないのか心配になった。

本江小（適正規模校）

- ・ 適正規模の学校なので活気にあふれており、子どもたちは人間関係を固定化されることもなく、社会性を身に付けることが可能であると感じた。
- ・ これ以上大きな規模になると、いじめや不登校など、様々な問題行動が発生することも予想される。
- ・ （この学校を視察して）500名から600名程度が理想的な規模だと感じた。
- ・ 小規模校と比較にならないくらい元気だった。こうした環境の中で子どもたちが切磋琢磨し、世の中で役立つ人間に向かって大きく成長していくものと強く感じた。
- ・ 保護者の立場からすると理想的な学級数は、やはり2クラスで30名ほどが一番良いと思った。
- ・ 授業に活気があり、一つの問題に対して多様な意見が聞けるので刺激になると思う。
- ・ 図工の作品などは、一部の児童のみが廊下に掲示されるとのことで、掲示してもらうためにやる気が出ると思った。
- ・ グループごとに作業を行う授業では、（児童が多いため）廊下で作業しているグループもあり、先生の目が全体に行き届いているのか疑問に思った。

大町小（小規模校）

- ・ 少人数教育の特徴を活かし、非常に落ち着いた雰囲気です授業が行われていた。
- ・ 空き教室が多く、学校全体がひっそりとした印象を受けた。
- ・ 5～6年先に50人程度の複式学級になると推測されているのに耐震工事中だった。災害時の地域住民の応急避難所としての役割を果たす目的もあるとのことだが、学校の耐震工事とは別問題の感じがした。多人数の学校で未実施のところもあり、順番に疑義を感じた。